

満腔の情熱を傾倒

～三万市民の輿望に應えて～

第1号

人口：3万2,303人 / 世帯数：5,601世帯
一般会計：1億2,243万円（合併後9月補正）

昭和29年6月1日に1町6村が合併し、「下妻市」が誕生しました。それから1月半後の7月15日に「下妻市報」第1号を発行。新聞と同じ大きさで、1枚両面刷りでした。紙面の冒頭では、7月17日に挙行される市制執行祝賀式典にあたり、「市長挨拶」が掲載されています。澤部元信市長は「一つはもつて県西に於ける文化の中心都市として、一つはもつて周辺生産物の加工都市として、或いは又新規工業都市として助成し、将来農、商、工、総合産業都市を建設せねばならぬのであります」と市政に対する強い決意を述べています。

連載コーナーでは、「営農」と題するコーナーが創刊時から始まり、農作業に対する時節の手入れや注意点、家畜に対する病気の予防策などが掲載され、農業が本市の基幹産業であった当時の姿がうかがえます。

「あとがき」では、秘書課広報係が「広報を市役所のものではなく、皆さまのものとして、ほんとうの意味の『われらの広報』として充分にご利用をお願いいたします」と書いています。創刊時から市民本位の広報づくりを心掛ける精神は今も引き継がれ、市民の生活に密着した出来事や情報を伝えてきました。

第2号（昭和29年8月20日発行）からは、広報紙の判型がタブロイド判（新聞の約半分の大きさ）になり、月1回を目安に発行されますが、発行日は不定期でした。

昭和29年7月15日発行



第1号

▶市制施行を祝うパレード（昭和29年度）



第100号 ▲睦ヶ丘中学校校舎一棟が全焼（昭和39年度）



第300号 ▼「黒駒の渡し」100年の歴史に幕（昭和56年度）



第200号 ◀工業団地造成工事始まる（昭和47年度）



今回は、「広報しもつま」700号発行の節目を記念して、第1号が発行された昭和29（1954）年7月15日から、700号発行の平成26（2014）年8月10日までの60年間、下妻市が歩んできた足跡を、第1号から100号ごとの記念号の記事などをダイジェストで紹介し、これまでの下妻市を振り返ります。

また、この面に掲載している写真は、記念号が発行された年度の主な出来事をあげてみました。皆さんの記憶にある写真や記事などはいくつあるでしょうか。

39年度総予算

～道路・教育問題が重点～

第100号

人口：2万9,230人 / 世帯数：5,878世帯 / 一般会計：2億6,768万円（当初）

第100号は、4月にあったことで当初予算の概要が一面となりました。当時の重点施策は、道路と教育。

道路事情は「自動車交通の増加に伴い、国道、市道とも悪路となり、市民の迷惑は極めて大きく、また産業発展にとりましても多大な障害となっている」と掲載され、完全舗装道路が熱望されました。

教育では、合併に伴う「統合中学校」の建設が急務とされ、一日でも早い教育の機会均等の実現に向けて予算が編成されました。

第90号（昭和38年4月5日発行）から、広報紙の判型がタブロイド判からB5版に変更され、第91号（昭和38年5月10日発行）の発行を機に、現在と同じく毎月10日の定期発行になりました。

また、一時的に市の人口が三万人を割り込んだ時期でもありました。

昭和39年4月10日発行



ふせごう交通事故

第200号

人口：2万7,905人 / 世帯数：6,271世帯 / 一般会計：10億8,700万円（当初）

昭和42年に交通死亡事故が3件であったものが、5年後の昭和47年には9件と3倍に増えるなど、本市で交通事故が増え続ける状況を重視し、現状と原因の把握、対応策が一面を飾りました。

「無免許運転」「酒酔い運転」「速度の出し過ぎ」「前方不注意」などにより、市内で起こった交通事故の実例をあげ、全国的には減少傾向にある交通事故が、本市では増え続ける現状を比較表で示しました。原因は「都市化が進み、国道はすべて完全舗装されたことで、通過車両が急激に、しかも大規模におそってきたため、一般市民がそれに対応しきれないことが、おおかたの見方である」と掲載しています。

そのような状況を重視した市では、昭和47年7月、新たに「交通安全課」を設け、交通安全対策を最重要項目として、市民の皆さんとともに積極的に交通事故防止に努めています。

昭和47年12月10日発行



第400号 ▲小貝大橋の開通に渡り初め1000人（平成元年度）



第500号 ▲第1回大人神輿連合渡御（平成9年度）



第600号 ▶鬼怒川水辺の学校完成（平成18年度）



「下妻市報」第1号から60年 「広報しもつま」は700号を迎えました